

氏名	ブラナン野口 純代 (ブラナンノグチ スミヨ)
本籍	東京都
学位の種類	博士(老年学)
学位の番号	博甲第99号
学位授与の日付	2021年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	ユニット型特別養護老人ホームの施設環境が入所者の生活の質に及ぼす影響 －Environmental Assessment Tool-High Careを用いた検討－

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	渡辺修一郎
	(副査) 桜美林大学教授	杉澤秀博
	桜美林大学教授	長田久雄
	和歌山大学名誉教授	足立啓

## 論文審査報告書

### 論文目次

第1章	序論.....	1
第2章	研究1: ユニット型特別養護老人ホームに適した環境尺度の比較検討	
	1. 目的.....	1

2. 既存の環境尺度の検討.....	1
3. 研究方法.....	2
4. 結果.....	2
5. 考察.....	2
第3章 研究2: EAT-HC 日本版作成に向けた日本語版 EAT-HC の 信頼性・妥当性の検証.....	3
1. 目的.....	3
2. 研究方法.....	3
3. 結果.....	4
4. 考察.....	5
5. 研究課題.....	6
6. 結語.....	6
第4章 研究3: ユニット型特別養護老人ホームの入所者の主観的 QOL と自発的行動 頻度との関連におよぼす施設環境の影響	
1. 目的および仮説.....	6
2. 研究方法.....	7
3. 結果.....	8
4. 考察.....	8
5. 研究課題.....	9
文献.....	10

## 論文要旨

ユニット型特別養護老人ホーム（ユニット型特養）は、個室化を原則とし、入所者の個性や生活リズムの尊重、在宅に近い居住空間、なじみの人間関係の提供を掲げた認知症対応型介護施設である。ユニット型特養入所者のほとんどが何らかの認知症を有している。先行研究では認知症が重症になるほど施設環境が入所者にとってより重要になることが報告され

ているが、ユニット型特養においては、施設環境の適切な評価指標が確立していないこともあり、入所する認知症高齢者の生活の質（Quality of life: QOL）に及ぼす施設環境の影響を検証した研究が行われていない。また、先行研究ではユニット型と従来型の特養入所者の生活行動の比較やユニット型特養のケア事例が多々報告されているが、認知症高齢者の好ましい行動と QOL との関係にユニット型特養の施設環境がどう関与しているのかも明らかになっていない。本論文は、上記の背景をもとに、ユニット型特養の施設環境と認知症を有する入居者の QOL との関連を明らかにすることを目的に実施した一連の研究成果をまとめたものである。

研究 1 は、既存の 20 の高齢者介護施設用環境尺度から、ユニット型特養の施設環境評価に最も適していると考えられる尺度を選出することを目的とした。既存の尺度から、信頼性、妥当性、評価対象、認知症への配慮等を詳細に検討した結果、Environmental Assessment Tool-Higher Care (EAT-HC)、Professional Environmental Assessment Protocol (PEAP)、Therapeutic Environment Screening Survey for Nursing homes and Residential Care (TESS-NH/RC) および PEAP 日本版 3 を候補とした。ユニット型特養の「入所者の身体・認知機能」、「環境設備に関する運営基準」に適合しているかどうかについて各設問内容を詳細に分析し、EAT-HC が、入所者の身体・認知機能面での適合度が高く、環境設備に関する運営基準面からもユニット型特養の環境尺度としてより有効であることを示した。また、PEAP と PEAP 日本版 3 は、認知症対応型共同生活介護施設により適した尺度であること、TESS-NH/RC は、簡潔に設備の評価に用いることができるが、認知機能支援に関する設問は十分でないことを示した。

研究 2 では、EAT-HC を翻訳した「日本語版 EAT-HC」について、有識者 12 名に対する調査、および、ユニット型特養 11 施設 30 ユニットの対象として実施した、日本語版 EAT-HC、他 3 尺度を用いた施設環境評価により、妥当性および信頼性を検証した。有識者への調査結果では、Item-level content-validity index は 77 事項中 71 事項が 0.79 以上、Scale-level content validity index は 0.88、Aiken の Content validity coefficient は 71 事項が 0.69 以上を示し、内容的妥当性を確認した。また、併存的妥当性を検討するために算出した、PEAP 日本版 3、PEAP、TESS-NH/RC の総合得点と日本語版 EAT-HC の間の相関係数は、それぞれ .78、.78、.65（いずれも  $p < .001$ ）であった。信頼性について、有識者間の Homogeneity reliability coefficient は全項目で 0.76 以上を示した。施設環境評価結果では、クロンバックの  $\alpha$  係数が 0.90 で下位項目が 0.88~0.98、級内相関係数が 0.90 で下位項目が 0.80~0.98、観察者間一致度の Exact count-per-interval は 90.3% で下位項目が 81.6%~94.3% といずれも高い値を示した。各設問の信頼性および妥当性を確認し、日本語版 EAT-HC が、わが国のユニット型特養の認知症入所者の生活の質と関連する環境を評価する尺度として適切なものであることを示した。

研究3では、研究2において妥当性および信頼性が確認された日本語版 EAT-HC を用いてユニット型特養 11 施設、29 ユニットの施設環境評価を行い、同ユニットに入所する認知機能低下のみられる男性 19 名、女性 82 名、平均年齢 88.1 歳（74～103 歳）の QOL 指標に自発的行動と施設環境がどう関連するかを検討した。対象者の評価は認知症ケアマッピング (DCM) に準じ、共用エリアの対象者の行動を 5 分毎に 2 時間観察し、23 の行動カテゴリーコード (BCC) に該当する行動を各時間枠に対し 1 つ選択した。自発的行動については DCM において認知症高齢者の良い状態を維持するための高い潜在力があると考えられている 14 事項の行動カテゴリーコードを指標とした。QOL 指標は同時に評価した各時間枠の DCM の ME (Mood / Engagement) 値を用いた。QOL 指標とユニット内環境および対象者の自発的行動との関連は、個人レベルとユニットレベルの 2 水準の独立変数で分析する階層線形モデル(HLM)を用いた。自発的行動、環境、認知症進行ステージはいずれも QOL 指標との間に正の相関がみられた。HLM により環境と入所者の QOL 指標との関連を検討した結果、環境が好ましいユニットにおいては自発的行動頻度が高いほど入所者の QOL 指標が高くなるが、環境が好ましくないユニットにおいては、自発的行動頻度が高くても、入所者の QOL 指標への効果はないことが明らかになった。本研究結果と先行研究の知見から、ユニット内の環境指数を包括的に高めることで、自発的行動頻度も高まり、QOL に好ましい効果を与えるものと考察している。

本研究は、わが国のユニット型特養の環境を適切に評価する指標を示し、入所者にやさしい施設環境が入所者の自発的行動を促進させ、さらには生活の質の向上につながることを実証したことに大きな意義があるといえる。

## 論文審査要旨

本論文は、普及してきたユニット型特別養護老人ホーム（ユニット型特養）の、認知症を有する入居者の生活の質と施設環境との関連を明らかにすることを目的に実施した 3 つの研究成果をまとめたものである。第 1 研究では既存の高齢者介護施設用の 20 の環境尺度を詳細に分析し、Environmental Assessment Tool-Higher Care (EAT-HC) が、入所者の身体・認知機能面での適合度が高く、環境設備に関する運営基準面からもユニット型特養の環境尺度としてより有効であることを示した。第 2 研究では、EAT-HC を翻訳した「日本語版 EAT-HC」について、有識者 12 名に対する調査により各設問の内容的妥当性、信頼性の検証を行い、また、ユニット型特養 11 施設 30 ユニットの調査から併存的妥当性および評価者間信頼性の検討を行い、信頼性および妥当性を確認し、日本語版 EAT-HC が、わが国のユニット型特養の認知症入所者の生活の質と関連する環境を評価する尺度として適切なものであることを示した。第 3 研究では、ユニット型特養 11 施設、29 ユニットにおいて環境

指標と入所者の ME (Mood / Engagement) 値からみた生活の質の指標との関連を検討し、認知症高齢者の自発的行動と生活の質の指標との正の関連は、施設環境が良いほどより顕著に表れることを明らかにし、ユニット内全体の環境改善をすることが入所者の生活の質の向上につながっていくものと考察している。

本研究は、わが国のユニット型特養の環境を適切に評価する指標を示し、入所者にやさしい施設環境が入所者の自発的行動を促進させ、さらには生活の質の向上につながることを実証したことに大きな意義がある。研究の枠組み、先行研究のレビュー、目的、新規性、研究方法、結果および考察、研究成果の活用のあるり方など論文全体について精査され、博士論文として十分な水準にあると判断し、合格と判定した。

## 口頭審査要旨

公開審査では 30 分間の論文概要の発表の後、30 分間の質疑応答がなされた。主査および副査からの質疑応答では、内容的妥当性が十分確認できていない 6 項目を残した理由については、併存的妥当性の確保、国際比較への応用、将来有効性が生じる可能性を考慮したことが説明された。認知症高齢者の自発的行動と生活の質の指標との正の関連は、施設環境が良いほどより顕著に表れたことの背景については、施設環境が悪いと、生活の質に及ぼす自発的行動などその他の要因の効果が打ち消されてしまうと考えられるが、本研究のデザインはその機序を明らかにするものではないことが説明された。その他の質問についてもそれぞれの確な説明、考察がなされた

公開試問後の主査・副査による審査会では、研究の枠組み、先行研究のレビュー、目的と意義、新規性、研究方法とその根拠、結果および考察、研究成果の活用のあるり方など論文全体について精査され、いずれも博士論文として十分な水準にあるものと確認された。

ユニット型特養の施設環境を、日本語版 EAT-HC を用いることにより、信頼性、妥当性をもって適切に評価できることを示したうえで、実証研究によりユニット型特養入所者の生活の質の指標と環境指標との関連を検討し、ユニット内全体の環境改善をすることが入所者の生活の質の向上につながることを実証した本研究の成果は、ユニット型特養の環境評価を実施する際の実践的ツールを提供するものであり、ユニット型特養で生活する高齢者の生活の質の向上のための取組みを樹立するうえで貴重なものになるものと判断された。以上により、博士論文として十分な水準にあるものと、主査および副査全員が合格と判定した。